

第61回日本リハビリテーション医学会学術集会

ランチョンセミナー8

ジグリング(ゆすり)運動を応用した 上肢機能改善の検証

Report on improvement of upper limb function using Jiggling exercise.

日時

令和6年6月14日(金) 12:30～13:30

会場

セルリアンタワー東急ホテル B2階
第2会場(ボールルームE)
〒150-8512 東京都渋谷区桜丘町26-1

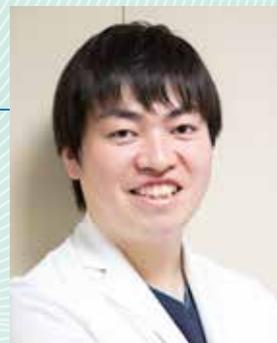
座長

神奈川リハビリテーション病院
病院長 杉山 肇 先生

演者

東京慈恵会医科大学附属病院 リハビリテーション科
THE JIKEI UNIVERSITY HOSPITAL Department of Rehabilitation

診療医長 羽田 拓也 先生
TAKUYA HADA



共催

第61回
日本リハビリテーション医学会学術集会/
Shisei Medical 株式会社

[取得可能単位]

日本リハビリテーション医学会教育研修講演単位(リハ単位)
日本整形外科学会教育研修単位(日整会単位)
日本運動器科学界運動器リハビリテーションセラピスト資格継続研究会(運動器単位)

整理券について: ランチョンセミナーは当日配布の整理券制となっております。

配布場所: セルリアンタワー東急ホテル B2F ボールルームABC / 配布日時: 令和6年6月14日(金) 8:00～10:00

ジグリング(ゆすり)運動を応用した 上肢機能改善の検証

東京慈恵会医科大学附属病院 リハビリテーション科

診療医長 羽田 拓也

2008年の厚生労働省の患者調査によれば、日本国内には約134万人の生活期脳卒中患者がおり、そのうち約55万人が脳卒中後遺症として上肢麻痺または上肢機能障害を有していると報告されている。以前は、生活期であっても、上肢機能の維持を目的とした理学療法士や作業療法士による外来通院でのリハビリテーション治療が行われていたが、現在は各種社会制度の変更に伴い、そのような維持的な治療を病院で長期間継続することは困難になりつつある。そのため、近年の生活期脳卒中後遺症患者の上肢機能訓練では在宅での自主トレーニングの重要性が増している。しかしながら、上肢機能を向上・維持するためには長期的かつ日常的な自主トレーニングの継続が必要であり、これは患者やサポートをする家族にとって体力的・精神的な負担となっている。そのため、当講座ではゆすり運動機器の使用による生活期脳卒中後遺症患者の新たな自主トレーニング方法を考案し、その安全性や有効性を検討したので報告する。

当講座では、以前から脳卒中後遺症による上肢機能障害の改善を目的に、外来通院でのボツリヌス療法と作業療法士による自主トレーニング指導の併用療法を行っている。しかしながら、患者だけでは自主トレーニングの長期的な継続は困難であり、以前より自宅であっても機器などを使用した他動的な運動を行うことが必要であると考えていた。今回、ボツリヌス療法を継続している患者を対象にして、新たに開発した自動ジグリング器を用いたランダム化比較試験を行い、機器使用によるFuglMeyer Assessment for Upper Extremity (FMA-UE)の変化量を検討したので報告する。自動ジグリング器は家庭用マッサージ器(株式会社トップラン社製、健康ゆすり)を上肢用に一部改変したものを使用した。ジグリング器は1回10分、1日3回(1日計30分)、12週間使用した。結果として、自動ジグリング器使用群のFMA-UEの変化量が $+1.93 \pm 3.51$ であったのに対し、非使用群では $+0.20 \pm 2.55$ であり、有意にFMA-UEのスコアが改善することが示された($p=0.001$ 、95%CI:0.40-3.07)。生活期脳卒中後遺症患者の上肢機能改善を得るためには、ボツリヌス療法などの治療に加えて、在宅での自主トレーニングの継続が重要であるが、その実施は困難であることが多い。

本研究では、在宅での自動ジグリング器を用いた他動的なリハビリテーション訓練が、患者の自主的な上肢機能訓練の長期継続と上肢機能の改善に寄与する可能性が示唆された。

本研究による成果は、生活期脳卒中後遺症患者やその家族の身体的・精神的負担を軽減し、上肢機能の改善だけでなく日常生活動作(ADL)および生活の質(QOL)の向上に寄与するものと期待される。